

れたすべてデータから編集された。このデータの 99% までが10個所の天文台における観測であり、さらにその半分近くがウィルソン山であって、リック、ピクトリアがこれに続く。

視線速度の基準としてリック天文台のⅢプリズムを使ったミルス分光器による値を採り、他の天文台の測定との系統差を各スペクトル型について求めた。この方法は既にムーアの星表で採用されている。系統差はだいたい ± 2 km/秒以内であり、各恒星についてこれを補正してすべてリックのシステムとし、乾板の枚数を重率とした加重平均値を求めた。つまり1個の恒星には1個の視線速度の値が掲げられている。この掲載値の信頼性は Q (quality) という量で示し、これには a, b, c, d, e の5段階がある。その誤差指数と星数の百分率を次表に示す。

Q	a	b	c	d	e
確率誤差の平均 (km/秒)	± 0.5	± 1.2	± 2.5	± 5
星数比 (%)	10.3	46.3	31.2	10.4	1.7

表の本体(図3)は星名、赤経・赤緯、等級、固有運動、スペクトル型、視線速度(a, b の星は0.1km/秒まで、 c, d, e は1km/秒まで)、 Q 、乾板の枚数、天文台の略号、注記等を順に掲げてあり、巻末には加重平均計算に使った各天文台ごとの平均値と乾板枚数を載せている。全体の90%以上が10等より明るい星であるが、セファイドについては15等の星もある。この星表は視線速度の値が使われただけでなく、スペクトル型についてもウィルソン山分類を最も多く掲げたものとして広く利用された。また Q という精度の表示法も、他の観測者に使われている例が多い。

この星表の改訂がテキサスのエバンスによって進められ、編集・校正も終り、既に出版されていてよいはずである。

ウィルソンの星表では、観測の時期を無視して、いわば強引に平均値を採った。これはこの星表の用途の一つとして、恒星運動の統計が考えられていたことによる。しかし分光連星のように本質的に視線速度の変化する星の研究には、個々の観測データが必要である。それで、ウィルソン星表のデータの半分近くを占めるウィルソン山の観測データを編集したものが

Abt, H.A. (1970, 1973): Catalogue of Individual Radial Velocities, Measured by Astronomers of the Mount Wilson Observatory, (Astrophys. J. Suppl. 19 (No. 179) および 26 (No. 234).)

である。第1部(1970年)には赤経0~12時の3500個の星の11000個のデータ、第2部(1973年)には赤経12~24時の個の3700星の12,000個のデータを収めている。いずれもウィルソン星表の番号、観測時、視線速

度、確率誤差、分光器の分散等を掲げている。

Abt, H.A. & Biggs, E.S. (1972): Bibliography of Stellar Radial Velocities, (Kitt Peak National Obs.)

は前世紀末以来の視線速度観測値の文献リストであって、約25000個の星について44000の報告を1100部の雑誌等から採出した。すべてなまの観測報告であって、編集された二次データは含んでいない。星名、ヘンリードレーパ星表番号、赤経・赤緯、等級、スペクトル型、目安としての視線速度の単純平均値、測定数、書名、巻、ページ、連星等の注記を掲げる。もともとIBMカードに編集したものであり、カードまたは磁気テープとしても入手できる。

このように視線速度については、エバンスの新しい星表あるいはアプトの文献目録からごく最近のデータまで解かるから、個々の観測星表については省略する。

天文月報第67巻(1974)総目次追加

【解説記事】

太陽表面最低温度.....西 恵三(V) 149

【 雑 報 】

1974年の接食.....水路部編暦課(I) 26

雑 報 [II]

木星第13衛星?

ヘール天文台(パロマー山)のコワールは、1974年9月11日から13日にかけて122cm(48吋)シュミット望遠鏡で撮ったプレート上、木星の近くに20等級の天体を発見した。この天体は天球上を木星と一緒にうごいているので、木星の衛星である可能性が高い。観測データからは、特殊な軌道を持った小惑星の可能性も残っている。

その後の観測から、第6, 7, 10衛星とよく似た軌道——周期250日程度、離心率0.15程度、軌道傾斜 25° 程度——を持っているらしい。(森本雅樹)

小惑星エロス(433番)の接近

1974年秋から1975年春にかけて地球に接近する。今回の接近は、地心距離0.15A.U.まで近づくので、光度も明るく観測には好条件なので、月惑星研究所のゲールは、国際協同観測を提唱している。予報等は次のとおり。

1974/75	α (1950.0)	δ	r	d	m
XII-21	8 ^h 03 ^m 1	+53°25'	1.163	0.219	10.1
31	8 02.5	+48 39	1.149	0.187	9.6
I-10	7 54.7	+40 43	1.139	0.164	9.1
20	7 44.7	+29 33	1.134	0.152	8.8
30	7 37.8	+17 02	1.134	0.154	8.8

(香西洋樹)